

# なぜ中東は燃え続けるのか

— 宗教・歴史・石油が交差する「世界の火薬庫」を完全解説 —

2026年3月 更新版

## 【はじめに】2026年、中東は全面戦争の瀬戸際に

2026年2月、米国とイスラエルがイランへの大規模軍事攻撃を開始し、イランの最高指導者ハメネイ師が暗殺された。イランは直ちに報復に踏み切り、湾岸諸国の米軍基地や石油施設、民間インフラへの攻撃を実行。ホルムズ海峡が事実上封鎖され、中東情勢はついに「全面軍事衝突」の段階へと突入した。

日本でも高市首相がエネルギー供給網の確保を経済産業相に緊急指示。原油価格は再び急騰し、「遠い中東の問題」が私たちの日常生活に直撃し始めている。

なぜ中東はこれほど長く、これほど複雑に燃え続けるのか。その答えを解くカギは、「宗教」「歴史」「石油」という3つの糸が何百年もかけて絡み合ってきた構造にある。本稿ではその全体像を、できる限りわかりやすく解説する。

## 第1章 3つの宗教の誕生と人口——同じ神を信じながら、なぜ争うのか

### ◆ 驚くべき共通点：3宗教はすべて同じ神を信じている

ユダヤ教・キリスト教・イスラム教は「アブラハムの宗教」と総称され、実は同じ神を信仰している。ユダヤ教でいう「ヤハウェ」、キリスト教でいう「父なる神」、イスラム教でいう「アッラー」は、すべて同一の神だ。クルアーン（イスラム聖典）の中でも「アッラーはユダヤ教・キリスト教の神と同じである」と明記されている。

さらに3宗教はアブラハムという共通の「先祖」を持つ。旧約聖書によると、神はアブラハムにカナンの地（現在のイスラエル）を与えると約束。アブラハムの長男イシュマエルがアラブ人の祖先となり、次男イサクがユダヤ人（イスラエル民族）の祖先となった。

三宗教の成立順序は以下のとおりだ。

- ユダヤ教：紀元前 13 世紀ごろ成立。世界最古の一神教。唯一神ヤハウェとの「契約」を根幹とする民族宗教
- キリスト教：紀元 1 世紀に成立。ユダヤ教から派生し、イエス・キリストを神の子=救世主とした。392 年にはローマ帝国の国教となり世界へ拡大
- イスラム教：7 世紀にアラビア半島で預言者ムハンマドが創始。ユダヤ教・キリスト教を「前段階の啓示」として吸収・発展させた最後の一神教

### ◆ 3 宗教の世界人口（2020 年ピュー研究所調べ）

宗教	世界人口	主な分布地域
ユダヤ教	約 1,478 万人 (0.2%)	イスラエル、北米、欧州
キリスト教	約 23 億人 (28.8%)	欧米、南米、アフリカ
イスラム教	約 20 億人 (25.6%)	中東、東南アジア、アフリカ

### ◆ なぜ同じ神を信じながら争うのか——聖地エルサレムという「爆心地」

3 宗教が共通して最重要視するのが、パレスチナに位置する「エルサレム」という都市だ。ユダヤ教徒にとっては「神殿の丘（嘆きの壁）」がある聖地。キリスト教徒にとってはイエス・キリストが処刑・復活した地。イスラム教徒にとってはムハンマドが天に昇天した岩がある「アル=アクサー・モスク」が第 3 の聖地だ。

同じ場所を「我々の聖地だ」と 3 宗教が主張する。これが中東問題の根本的な「爆心地」となっている。

## 第 2 章 イスラエルはなぜ孤立するのか——建国から続く対立の歴史

### ◆ 2000 年以上にわたる「流浪の民」の歴史

紀元前、パレスチナにはユダヤ人の王国が存在した。しかしローマ帝国による支配・反乱鎮圧の末、紀元 2 世紀以降ユダヤ人は世界各地に離散（ディアスポラ）した。以来 1800 年以上、ユダヤ人はヨーロッパで少数民族として暮らし、激しい差

別・迫害（反ユダヤ主義）にさらされ続けた。

19世紀末、「パレスチナに祖国を再建しよう」というシオニズム運動が生まれる。同じころ、オスマン帝国の支配下にあったパレスチナには、もともとアラブ人（パレスチナ人）が多数住んでいた。

### ◆ 「三枚舌外交」が生んだ混乱

第一次世界大戦中、イギリスは3者に対してそれぞれ相互に矛盾する約束をしてしまった。アラブ人には「独立を支援する」と約束し（フサイン・マクマホン協定）、ユダヤ人には「パレスチナにユダヤ人の郷土建設を支持する」と宣言し（バルフォア宣言・1917年）、フランスとは「中東を秘密裏に分割統治する」と密約を結んだ（サイクス・ピコ協定・1916年）。

この「三枚舌外交」こそが、現在に続く混乱の根本的な原因だ。ユダヤ人とアラブ人の双方が「この地は我々のものだ」と正当に主張できる根拠をイギリスが与えてしまったのである。

### ◆ 1947年国連決議と「レークサクセスの奇跡」——ロビー活動の実態

1947年11月29日、国連総会でパレスチナ分割決議（181号）が賛成33、反対13、棄権10で採択された。この決議はパレスチナ全人口の3分の1にすぎなかったユダヤ人に対し、土地の57%を割り当てるという内容で、アラブ側にとって著しく不公平なものだった。

当初、この決議は否決されると見られていた。しかし採決前日まで反対を表明していた12の中小国が当日一斉に賛成に転じ、「レークサクセスの奇跡」と呼ばれた。この裏には、ニューヨークを拠点とするシオニスト・グループの強力なロビー活動があったとされている。中心人物はイスラエル初代首相となるダヴィッド・ベン・グリオンのだった。

アメリカがイスラエル支持に踏み切った背景については、トルーマン大統領が「イスラエルは票になるが、アラブは票にならない」と発言したとも伝えられており、大統領選挙でのユダヤ系市民票の取り込みという国内政治的動機が重要な役割を果たした。また米国は、地中海沿岸に親米国家を作ることで、冷戦下でソ連の影響力を封じ込めるという戦略的計算も持っていた。

「買収」という強い言葉を使うかどうかは議論のあるところだが、各国への圧力・説得・外交的取引が組み合わされて結果を動かしたことは複数の歴史研究が示して

いる。いずれにせよ、この決議が「純粋な国際正義の実現」ではなく、資金力と政治力を持つシオニスト・ロビーの働きかけによって大きく左右されたという事実は、現代のイスラエル・ロビーの強大な力を理解する上での原点となっている。

#### ◆ イスラエル建国と 4 次につながる中東戦争

第二次大戦中のホロコースト（ナチスによる 600 万人規模のユダヤ人虐殺）を経て、1948 年にイスラエルが建国を宣言。アラブ諸国はただちに宣戦布告し第 1 次中東戦争が勃発。70 万人以上のパレスチナ・アラブ人が故郷を追われ難民となった（「ナクバ（大災厄）」）。以降、1956 年（第 2 次）、1967 年（第 3 次・六日間戦争）、1973 年（第 4 次）と戦争が続いた。

#### ◆ イランとの対立——1979 年の劇的な転換

イスラエルとイランの関係は、1979 年以前はむしろ良好だった。しかし 1979 年のイスラム革命で、ホメイニー師率いるイスラム共和国が誕生すると状況は一変。新政権はイスラエルを「イスラムの敵」と定義し、ヒズボラ、ハマス、フーシ派など各地の武装勢力を「抵抗の枢軸」として支援。以来イランはイスラエルと間接的に戦い続けてきた。

### 第 3 章 スンニ派とシーア派——イスラム教「内なる分裂」が中東を動かす

#### ◆ 分裂の起源は 7 世紀の後継者争い

イスラム教の分裂の起源は、預言者ムハンマドが 632 年に死去した直後にさかのぼる。「血統」によってムハンマドのいとこ・娘婿のアリーを後継者とすべきと主張したのがシーア派、「実力・能力」で選ぶべきとしたのがスンニ派だ。680 年のカルバラーの悲劇（フサインの虐殺）が決定的な分裂点となった。

#### ◆ 世界のイスラム教徒の宗派分布

宗派	割合	主な国
スンニ派（スンナ派）	約 87~90%	サウジアラビア、トルコ、エジプト、インドネシア、パキスタンなど
シーア派	約 10~15%	イラン（約 90%）、イラク（約 60%）、バーレーン（約 70%）、アゼルバイジャン

(約 70%)

### ◆ スンニ派とシーア派の戒律・慣行の違い——厳格さと柔軟さ

両派の教義の根幹（クルアーンへの信仰、礼拝、断食、巡礼など）は共通している。しかし細部において、スンニ派は概して戒律が厳格で、シーア派はいくぶん柔軟な面を持つとされる。

項目	スンニ派（厳格）	シーア派（柔軟）
法源の根拠	コーラン+ハディース+法学者の「類推」と「合意」を認める	コーランとイマームの権威のみ。人間の「類推」や「合意」は不完全として排除
礼拝回数	1日5回（正式な礼拝時間に厳格）	実質1日3回でも可（礼拝を組み合わせて行える）
偶像崇拜	厳格に禁止。宗教指導者の肖像も不可	イマーム（指導者）の肖像・絵は許容。礼拝時に「モフル（丸石）」を使う
聖職者の権威	階層構造なし。イスラム法学者の解釈が分散的	最高指導者（アヤトッラー）を頂点とする厳格な聖職者ヒエラルキーが存在
殉教の追悼	特別な追悼儀式なし	毎年「アーシューラー」でフサインの殉教を盛大に追悼（自己鞭打ち等を行う地域も）
聖地・巡礼	メッカ・メディナ・エルサレム（3大聖地）	3大聖地に加え、カルバラー・ナジャフ（イラク）への独自巡礼あり
サウジアラビアのワッハーブ派	スンニ派の一派で最も厳格。音楽や女性の外出制限など	（スンニ派内最保守派のため、シーア派に強い敵意を持つ）

注目すべきは「世俗化の度合い」だ。シーア派が多数のイランは国家の法律がイスラム法に基づくが、同じシーア派多数のアゼルバイジャンは逆に世俗的な生活を送る人が多い。一方スンニ派でも、サウジアラビアのワッハーブ派は世界で最も厳格なイスラム解釈を実践しているのに対し、トルコのスンニ派は相対的に世俗的だ。

つまり「スンニ派＝厳格、シーア派＝緩い」という二項対立ではなく、それぞれの国・地域・文化的背景によって実際の戒律の運用は大きく異なる。

#### ◆ サウジアラビアとイランの「代理戦争」

中東の地政学を理解する上で最も重要な構図が、スンニ派の盟主サウジアラビアとシーア派の盟主イランの対立だ。両国は直接戦争を起こすことなく、イエメン内戦、レバノン政治、イラク政界など各地の代理勢力を通じて影響力を争い続けている。ただしこの対立は単純な「宗教戦争」ではなく、ペルシャ人（イラン）とアラブ人（サウジ等）の民族的対立、地域覇権争い、石油利権をめぐる経済的対立が複雑に絡み合っている。

## 第4章 なぜユダヤ人はお金儲けが得意なのか ——1800年の差別が生んだ逆説

#### ◆ 「高利貸ししか許されなかった」歴史的背景

ユダヤ人が金融に強い理由を理解するには、中世ヨーロッパに遡る必要がある。キリスト教社会では「利子を取る行為」は聖書で禁じられており、農地所有も職業選択も厳しく制限されたユダヤ人が事実上唯一許されたのが、高利貸し・両替商・金塊保管などの金融業だった。

逆説的に、キリスト教社会が忌み嫌い、ユダヤ人に押し付けた「金融業」こそが、後に現代資本主義の根幹を形成することになる。ユダヤ人はこの「しか許されない職業」で2000年にわたって技術を磨き、世界中を渡り歩く中で為替・貿易決済・国際送金の高度な専門知識を蓄積した。

#### ◆ ロスチャイルド家に見るユダヤ金融の台頭

その象徴的な存在が「ロスチャイルド家」だ。18世紀後半、神聖ローマ帝国フランクフルトのゲットー（ユダヤ人隔離区域）で両替商を営んでいたマイアー・アムシェル・ロートシルトが一族の礎を築いた。

マイアーの5人の息子はフランクフルト・ウィーン・ロンドン・ナポリ・パリに散らばり、伝書鳩や自前の高速船を使った情報ネットワークを構築。ナポレオン戦争では各国に軍資金を融資し、特に三男ネイサンがワーテルローの戦いの結果をいち早く入手して英国債の売り買いで莫大な利益を得たエピソードは有名だ。1815年に約13万ポンドだった一族の資産は、わずか10年後の1825年には約400万ポンド

へと急成長した。

さらにロスチャイルド家はシオニズム運動を財政的に支援。1875年にはイギリスのスエズ運河株式買収資金を融資し、1917年のバルフォア宣言（ユダヤ人の「郷土」建設支持を宣言したイギリスの外交文書）はロンドンのロスチャイルド家当主に宛てられたものだった。

### ◆ 迫害が生んだ「知的資本」への投資

ユダヤ人がお金を稼ぐのが得意なもう一つの理由が、「土地に投資できない分、人への投資（教育）を重視する」という文化的伝統だ。土地も財産も次の迫害でいつ奪われるか分からない歴史を生きてきたユダヤ人は、「頭の中にあれば奪えない知識・技能・ネットワーク」こそ最大の資産と考えた。

その結果、ユダヤ人は人口比で見てノーベル賞受賞者の約20～22%を占め、医学・物理・経済学・文学など各分野で突出した業績を残してきた。アインシュタイン、フロイト、カール・マルクス、ジョージ・ソロス、そしてFacebook創業者マーク・ザッカーバーグもユダヤ系だ。

### ◆ 現代における経済・政治的影響力

現代でも、米国ウォール街の主要投資銀行のトップにはユダヤ系が多く、ハリウッドのメディア産業でも強大な影響力を持つ。人口の約2%にすぎないユダヤ系アメリカ人が政治・金融・メディアで発揮する影響力は、この1800年の歴史の積み重ねによるものだ。

重要な注意点がある。「ユダヤ人が世界を支配している」という陰謀論は歴史的に反ユダヤ主義の道具として悪用されてきた危険な偏見だ。彼らの経済的成功は「迫害と排除の歴史に対する適応の結果」であり、「知識・ネットワーク・教育への継続的投資」の成果だという事実を正確に理解する必要がある。

## 第5章 石油という名の「呪い」——欧米・中国・湾岸諸国の利権争い

### ◆ 欧米による中東支配の起源：サイクス・ピコ協定

1916年5月、第一次大戦の最中にイギリスとフランスは秘密裏に「サイクス・ピコ協定」を締結した。オスマン帝国崩壊後の中東を2カ国で分割する密約だ。この線

引きは、それまで存在した民族・部族・文化的な境界線をまったく無視した恣意的なものだった。この「人工的な国境線」は現在に至るまで中東の不安定要因として機能し続けている。

### ◆ 石油利権の歴史：セブンシスターズから OPEC へ

20 世紀初頭から 1970 年代まで、中東の石油はエクソン（アメリカ）、ブリティッシュ・ペトロリアム（イギリス）など欧米 7 大石油会社「セブンシスターズ」が支配していた。産油国は自国の資源でありながら価格決定権を持たず、わずかな利益しか得られなかった。これへの反発から 1960 年に OPEC（石油輸出国機構）が創設された。

### ◆ 1973 年石油ショック：石油が「武器」になった日

1973 年 10 月、第 4 次中東戦争が勃発するとアラブ産油国はイスラエルを支持する欧米・日本への石油禁輸を宣言。原油価格は 3 カ月で約 4 倍に高騰した。日本では「トイレットペーパー騒動」が起き、高度経済成長が終焉を迎えた。この危機は「中東の石油が世界経済の生命線である」という現実を世界に突きつけた。

### ◆ 現代の利権構造：米中対立と石油ドル体制

冷戦後、アメリカは「ペトロダラー体制」（石油はドルで取引されるという国際的合意）を通じて中東への影響力を維持してきた。一方、中国はイランとの関係を深め、イランの原油輸出量の 8 割以上を輸入。サウジアラビアとも緊密な関係を築きつつある。「中東の石油」をめぐる米中対立は、地政学的なダイナミクスを根本から変えつつある。2026 年のホルムズ海峡封鎖は、この構造が最悪の形で現実化した事態だ。

## 第 6 章 アメリカはなぜイスラエルを支持し続けるのか

### ◆ ユダヤ系ロビイストの政治力

アメリカの人口に占めるユダヤ人の割合は約 2% にすぎない。しかし AIPAC（アメリカ・イスラエル公共問題委員会）をはじめとするユダヤ系ロビイスト団体はワシントンで強大な政治力を持つ。第 4 章で述べた歴史的な資金力と情報ネットワークが、現代の政治ロビー活動の基盤ともなっている。

## ◆ キリスト教福音派の「イスラエル支持」

キリスト教保守派（福音派）の終末思想では「イスラエルにユダヤ人が集まること  
がキリスト再臨の前提条件」とされており、共和党支持層に多い福音派の票がアメ  
リカの対中東政策に大きな影響を与えている。

## ◆ 中東における米軍の戦略的利益

アメリカが中東に関与し続ける理由は宗教・ロビイストだけではない。サウジアラ  
ビアとの石油ドル体制の維持、湾岸諸国の米軍基地ネットワーク、イランの核開発  
阻止——これらの戦略的利益がアメリカを中東政治の主役として縛り続けている。

# 第7章 日本はどうする——エネルギー危機の現実

## ◆ 日本は「中東リスク」から逃れられない

日本の原油輸入の約 95%は中東に依存している。ホルムズ海峡を通過する石油が止  
まれば、日本経済は機能停止する。2026年のホルムズ海峡封鎖危機は、それが決し  
て「絵空事」ではないことを現実として示した。日本政府はナフサの確保と原油先  
物市場への介入を模索しているが、根本的な解決策は「脱中東依存」に求めるほか  
ない。

## ◆ 再生可能エネルギーへの転換とエネルギー安全保障

今回の危機が改めて浮き彫りにしたのは、日本のエネルギー政策の脆弱さだ。太陽  
光・風力・水素などの再生可能エネルギーへの転換、原子力発電の再評価、省エネ  
技術の徹底——これらへの投資は単なる「環境政策」ではなく、国家安全保障の問  
題として捉え直す必要がある。

## おわりに 宗教・歴史・資源が絡み合う「解けない方 程式」

本稿で見てきたように、中東問題は決して「遠い国の宗教戦争」ではない。3000年  
以上の歴史を持つ宗教対立、帝国主義時代に欧米が引いた恣意的な国境線、地球上  
の石油埋蔵量の約 60%を握る資源の呪い、1800年の迫害が生んだユダヤ人の経  
済・政治的影響力、そして現代の米中対立——これらがすべて連動して「解けない  
方程式」を形成している。

「正義の側」は存在するのか、という問いへの答えは、どの立場から見るかによっ

て大きく異なる。ユダヤ人には 2000 年の流浪の末に国家を持った「正義」がある。パレスチナ人には故郷を奪われた「正義」がある。アラブ諸国には自分たちの土地と資源を支配されてきた「正義」がある。

私たちが中東問題を学ぶ意味は、単純な善悪二元論を超えて、複雑な歴史と現実を理解することにある。そしてホルムズ海峡一本で日本経済の命運が左右されうる事実を、エネルギー政策という具体的な課題として捉え直すことにある。「世界の火薬庫」の炎は、遠く離れた私たちの暮らしにも確実に燃え移ってきている。

---

参考：ピュー研究所（2025 年）、外務省、藤村信『中東現代史』（岩波新書）、横山三四郎『ロスチャイルド家』（講談社現代新書）、岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第 41 号、Wikipedia 各項目、各種報道資料